



古田元夫、『東南アジア史10講』（岩波新書）岩波書店，2021，viii+281+7p.

一般に通史を書くことは、たやすいことではない。ましてや多様な東南アジアをひとりでバランスよく書くには、研究者が少なく研究蓄積が乏しすぎるために、大胆な実験を含む歴史叙述を試みざるを得ない。まずは、この困難な試みに挑んだ著者に敬意を表したい。

東南アジア通史をひとりで書くことの困難な理由を列挙していけばきりが無い。まず、参考になる基本文献が少ない。本書巻末にあげられている『岩波講座 東南アジア史』（全9巻+別巻，2001-03年）や『世界各国史 東南アジア史』（全2巻，山川出版社，1999年）があるが、すでに出版されてから20年ほどが経過し、最新の研究状況を踏まえてのものではない。世界歴史大系の1冊として『タイ史』（飯島明子・小泉順子編，山川出版社，2020年）が出版されたが、ほかの国・地域について出版される予定はなく、タイ史1冊だけでは近隣諸国・地域との関係を考えて、東南アジア通史に取り込むことはむづかしい。

東南アジア史に限らず、どの国・地域においても、研究状況に粗密があることは致し方ないが、前記の基本文献において、たとえば1863年のフランスによる保護国化以降のカンボジアの記述がインドシナ戦争まででないなど、途方に暮れる現実がある。原史料に基づいた専門書や研究論文は信頼できるものとして参照できるが限られており、大半の叙述の事実確認をすることは不可能に近い。たとえば、現在タイの王宮・ワットプラケオ（エメラルド寺院）の一郭にはアンコールワットの模型があるが、アンコールワットがタイ領であったのはいつか、評者が書いたものを含め間違ったものがあり、確認することはたやすいことではない。

原史料については、前近代であれば金石文、近現代史においては植民宗主国など欧米の視点で残された文献がおもなものになる。高温多湿な熱帯で椰子の葉などに書かれたものや、木や竹ででき

たものなどは残されなかったし、残されたものだけでは人びとの優れた文化など生活の跡を十分に感じることはできない。そもそも前例を重んじる定着農耕民社会とは違い、海域社会には記録を残すという習慣がない。流動性の激しい海域社会では、臨機応変に対応しなければならず、前例に固執すれば文字通り致命傷になるからである。残されている欧米の文献を中心にみることで、わかっているものもあるいはすでに馴染みあるものになっているために、「ベトナム戦争」（抗米救国戦争）や「米比戦争」（比米戦争）などと表記してしまう。

もっとも安直に考えられるのが、各国の歴史教科書などを参考にすることだが、日本の戦前・戦中の皇国史観のように偏った歴史観を基本とする国があり、近隣諸国の歴史観と衝突する。そもそも近代歴史教育は、国民国家の国民のための教育であって、外国人がそのまま受け入れることができないものが含まれている。2015年にASEAN共同体が成立し、共通の歴史観が模索されているが、とくに前近代史はむづかしい。また、面積も人口も大きく違う各国を、量も質も「平等」に語ることは不可能である。同じ国の歴史研究者でも、一国史中心の者と、それを相対化しようとする者として、歴史叙述は違ってくる。

などなど、これらの問題を考えると本書を批判することは簡単であるが、批判するためにはこれまで書かれた通史と比較するか、評者自身がこれから書くことを前提に提言するしかない。

本書は、時系列につぎの10講からなり、第1講の前にも最後の第10講の後にも「主要参考文献」以外になにもない。

- 第1講 青銅器文化と初期国家の形成 先史時代～9世紀
- 第2講 中世国家の展開 10世紀～14世紀
- 第3講 交易の時代 15世紀～17世紀
- 第4講 東南アジアの近世 18世紀～19世紀前半
- 第5講 植民地支配による断絶と連続 19世紀後半～1930年代①
- 第6講 ナショナリズムの勃興 19世紀後

半～1930年代②

第7講 第二次世界大戦と東南アジア諸国の
独立 1940年代～1950年代

第8講 冷戦への主体的対応 1950年代半
ば～1970年代半ば

第9講 経済発展・ASEAN10・民主化 1970
年代半ば～1990年代

第10講 21世紀の東南アジア

主要参考文献

本書の試みや挑戦は、著者自身のことばで述べられていない。だが、とくに前近代史を含む第1-4講では、冒頭で東アジア史や南アジア史との連関を踏まえつつ、地域の時代的特徴を明らかにしようとしている。第4講の最後では、「東南アジアの大陸部およびそれに境界を接する中国南部の、山地民が居住する地域をさす」ゾミアをとりあげ、国家権力に取り巻かれず、これまでの歴史叙述のなかに出てこなかった人びとの存在を紹介している。

本格的な近代になる19世紀後半以降を扱う第5講以降では、現在の国民国家を中心に語らざるを得なくなるが、欧米の植民宗主国の動向を含め、世界史との連関を踏まえつつ、各国・地域の特色を描こうとしている。そして、ASEAN10へと発展し、自律性を高めてきた地域としての東南アジアの課題をあげ、今後の日本との関係を示唆して本書を閉じている。

本書の特色は、第1講「一 東南アジア地域の特徴」であげられている。東南アジアは地理的条件にも規定されて「まとまりを欠く地域だった」が、1990年代にASEAN10が成立した。著者は、こうした「まとまりのない」東南アジアを結ぶ共通性を、農業と交易を支える稲作技術と船舶技術の進化に求めている。東南アジアは、外部の影響を受けて交易で繁栄する「海の東南アジア」と外部と遮断されて農業が発達する「陸の東南アジア」が盛衰を繰り返して歴史を形づくってきたとし、「陸域に基盤を置く国家」と「海域に基盤をもつ国家」という従来大陸部と島嶼部にわけた東南アジア史を、東アジア史や世界史と連関させることによって、両者を峻別するのではなく、両者の盛

衰の繰り返しによってそのダイナミズムを形成してきたとする。それが、多様でまとまりのない地域を統合へと向かわせた。

本書の試みや挑戦が見えにくいのは、本書の「序章」「終章」がないだけではなく、各講の「はじめ」「おわりに」がないからだろう。大学などでの講義を想定するなら、講義を受ける者は東南アジアについてなにも知らないことを前提にしなければならぬだろう。各講でのポイントはなになのか、なにに注意して聴けばいいのかなどの指針を「はじめに」で示し、「おわりに」でなにがわかって、なにがわからないので、今後考えていかなければならないのか、つぎの講へどう繋がるのかなど、余韻を残すことも必要だろう。

本書は日本人読者を想定しているため、外国語文献は1点しかあげられていない。当然、日本独自の東南アジア史があってしかるべきだが、1点だけあげるとすれば第3講「交易の時代 15世紀～17世紀」に大きな影響を与えた、東南アジア史研究の第一人者のアンソニー・リードが2015年に出版した通史（Anthony Reid, *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*, Wiley Blackwell, 日本語訳：『世界史のなかの東南アジア——歴史を変える交差点』名古屋大学出版会、2021年）をあげるべきだろう。日本語訳の『大航海時代の東南アジア』（法政大学出版局、2002年）のタイトルとは真逆となる、西洋中心史観の「大航海時代」の歴史から解放された、東南アジアの自律史観で語った「商業の時代」の著者は、東南アジア史研究に新風を吹き込み続けている。

東南アジア通史は、欧米豪、日本などの歴史研究者が単独で、あるいは専門とする国・地域ごとに分担して書かれてきた。ASEANの3本柱のひとつ、社会・文化共同体で共通の歴史観について模索している今日、冒頭であげた困難は東南アジア各国の研究者による「東南アジアのなかの一国史」研究の積み重ねのなかで、克服できるようになるのかもしれない。本書最後で述べられている東南アジアと「より『対等のパートナーシップ』」を今後築くためにも、確固とした東南アジア史観をもつ必要がある。本書は、そのためにも有用な「東南アジアを知るための第一歩」で、分担執筆では

描けない一貫性と連続性をもっている。

(早瀬晋三・早稲田大学国際学術院大学院アジア太平洋研究科)

飯島明子；小泉順子（編）、『タイ史』山川
出版社，2020，ix+422+97p.

本書は、先史時代から現代までのタイの通史をまとめた一般書である。歴史教科書で著名な山川出版社による通史シリーズとしては1999年に刊行された『東南アジア史I, II』が存在するが、こちらが「新版世界各国史シリーズ」に含まれるのに対し、本書は「世界歴史大系」シリーズの中の1冊として位置づけられている。本書も一般書ではあるものの、参考文献欄にはタイ語や英語を含む数多くの先行研究が記載されており、具体的な一次資料や最新の研究成果に言及している箇所も多い。本文中での出所の明記もなされていることから、『東南アジア史I, II』よりも専門書的な色合いが濃く、対象とする読者層も一ランク上の感がある。

「はじめに」の記述によると、本書の刊行は当初2000年頃に故石井米雄氏を編者として行う計画で動き出したようであるが、石井氏が2010年に亡くなったことで計画は一時頓挫してしまった(p.i)。しかしながら、既に石井氏の担当する章の原稿は完成していたことから、新たな編者の下で計画は再開され、最終的に2020年によく陽の目を見ることとなった。

本書は最初の序章に続き、古代から現在に向けて時系列に計7つの本章が配置されており、執筆者はそれぞれ異なる。最初の序章「タイ史から何を学ぶか」は編者の1人である飯島明子氏によるものであり、本書で扱う「タイ史」の前提として、タイにおける「公定史観」に基づく歴史について、それに異を唱えてきたトンチャイ・ウニツチャクーンやチャーヌウィット・カセートシリなどのタイ人研究者の著作や言動を踏まえながらその問題点を指摘している。

第1章「先史・古代のタイ」は新田栄治氏が執筆した部分であり、タイにおける人類の出現からタイ族が現在のタイの領域に入ってくるまでの時

代を扱っている。新田氏の専門は考古学であることから、本章の内容も先史時代に重点が置かれており、とくに稲作農耕社会が成立した後の青銅と鉄の時代の記述が充実している。古代については、現在のタイ領内に出現したドヴァーラヴァティと、その後東北部や中部に勢力を伸ばしたクメールについても十分言及されているが、マレー半島についてはやや記述が少ない印象を受ける。

第2章「北方の『タイ人』諸国家」は飯島氏の手によるものであり、13世紀に出現したスコタイとランナーという2つのタイ族国家を中心に、その盛衰を取り上げている。「公定史観」に基づく単線的王朝史観ではスコタイ～アユタヤーとつながっており、北部の中心地チエンマイを中心に栄えたランナーはあくまでも「脇役」でしかないが、飯島氏の専門がランナーなどまさに北方の「タイ人」諸国家の歴史研究であることから、本章ではスコタイよりもむしろランナーが主役となっている点が大きな特徴である。「公定史観」では、スコタイは15世紀にもアユタヤーの配下に置かれて事実上吸収されたことになっているが、ランナーはその後ビルマ族による支配を経て最終的に20世紀初頭にバンコクに併合されるまで独自の政権を維持していたことから、ランナーの歴史のほうがスコタイよりもはるかに長い。このため、本章でもランナーの扱いのほうが大きくなっているのである。

第3章「港市国家アユタヤー」は当初の編者であった石井氏が担当した部分であり、アユタヤー（アヨータヤー）の成立から滅亡までの時期を扱っている。石井氏は既に『タイ近世史研究序説』を始めとして数多くのアユタヤー史に関する学術書や一般書をまとめているが、時期的に見ても本書はこれまでの石井氏のアユタヤー史研究の成果が最大限に反映されたものと思われる。とくに、「公定史観」において「タイ史を北から南へ向かう陸域的発展ととらえる立場を離れ」、「海洋勢力の内陸へ向かっての発展過程としてとらえている」点の特徴である(p.149)。このため、本章においては交易を介した諸外国との国際関係の変遷に重点が置かれており、アユタヤー外交史としての側面が強い。